

大学体育における柔道授業に関する研究動向について

—— 教育の質保証に向けた今後の研究の方向性の検討 ——

木浪龍太郎¹⁾ 松本隆太郎²⁾ 長島 和幸¹⁾ 根本 想²⁾

Research Trends on Judo Classes in University Physical Education:

A Study of Future Research Directions for Quality Assurance of Education

Ryutaro Kinami Ryutaro Matsumoto Kazuyuki Nagashima So Nemoto

Abstract

The purpose of this study is to understand the research trend of judo classes in university physical education, and to clarify the direction of future research from the viewpoint of educational quality assurance.

In this study, 36 references were included in the analysis. After reviewing and organizing the contents of the literature, we found that there are two main trends in research on judo classes in university physical education: research on understanding the actual conditions of learners, and research on the contents and methods of teaching in classes.

Finally, future research directions were examined based on the issues presented in previous studies. As a result, future research issues related to the three perspectives of educational objectives, teaching content and methods, and assessment were identified.

Key words: Judo classes, university physical education, research trends, quality assurance of education

キーワード: 柔道授業, 大学体育, 研究動向, 教育の質保証

I. 緒 言

近年、日本における大学教育に関して、学士課程教育の質の保証に向けた様々な提言や改革がなされている。特に、2018年に中央教育審議会から出された「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」(答申)においては、これまで各大学に求められてきた教学マネジメントの促進に加えて、学生の学修成果や大学全体の教育成果の可視化およびそれらに関わる情報公開の必要性が言及されており、大学教育における質の保証に向け

た益々の改善が期待されていることが、答申の内容からうかがえる。翻って、大学における体育授業(以下、大学体育とする)は、1991年の大学設置基準の大綱化に伴って保健体育科目が必修科目ではなくなるなど、大学における教育科目としての存在意義が問題視されてきた経緯を有している。このような経緯もあり、大学教育における体育授業の在り方を改めて見直そうとする動きが各所で見られる。例えば、2009年には全国大学体育連合が体育・スポーツ・健康に関連する諸団体と合同で声明を出し、ディプロマポリシーやカリ

1) 福岡大学スポーツ科学部

2) 育英大学教育学部教育学科スポーツ教育専攻

キュラムポリシーなど、各大学が設けている学士課程教育の質保証に向けた規定と絡めて体育・スポーツの重要性を学士課程教育に位置づけるよう全国の高等教育機関に改めて要請している。また、2011年には全国体育系大学学長・学部長会が体育・スポーツに関する学問領域の教育課程編成上の参照基準を作成している。このように、体育・スポーツ分野においても、大学教育における質保証に向けた動向を踏まえて様々な取り組みがなされており、実際の授業内容を各大学の教員が検討する際の拠り所となる基本的な方向性が整備されつつあるといえよう。

しかし、こうした動向が確認できる一方で、川戸・長谷川（2019）が提示した大学体育における授業設計の実態調査は示唆的である。川戸・長谷川（2019）は柔道授業を実施している日本国内の大学のうち、750大学を対象にシラバス分析を行うとともに、授業担当者が判明している56大学の授業者へのアンケート調査を実施し、大学における柔道授業の実施状況ならびに授業設計の実態を調査している。その結果、「目標」「内容・方法

「評価方法」という授業設計において必要な3つの要素が大学体育における柔道授業の中に現状どのように反映されているかが明らかとなり、授業設計上の今後の課題と合わせて、川戸・長谷川（2019）は表1のように整理している。

川戸・長谷川（2019）の主たる研究上の関心は大学体育における教育目的を十分に達成するための授業設計に関する研究の蓄積を目指すことにあり、そのための現状把握に向けて対象種目を柔道に限定している¹。そのため、川戸・長谷川（2019）は調査結果をもとに整理した課題についても、大学体育における柔道授業としての課題も含むが「課題の多くは、柔道授業固有の課題というより、大学体育授業設計上の課題であった」（川戸・長谷川、2019、p.39）との見解を示している。この見解の妥当性については、他のスポーツ種目の授業を対象とした実態調査や調査結果の比較検討などによって検証する必要性は残されているものの、少なくとも川戸・長谷川（2019）によって大学体育における柔道授業の実態は概ね明らかとされていることが確認できる。このような研究成果を踏

表1 川戸・長谷川（2019）における研究成果と今後の課題

	目 標	内 容・方 法	評 価	そ の 他
柔道授業の実態	「運動技能領域」と「認知領域」に関する目標が多く設定されていた。「社会的行動領域」と「情意領域」に関する目標設定に課題があった。	学習指導要領に準拠した内容が扱われていた。教授方法として、「類縁性のある準備運動の活用」、[技能に関わる示範]や説明が実施されていた。	アンケート調査に回答したすべての授業で「実技テスト」が実施されていた。シラバス分析では「平常点」という記述が多くみられたが、アンケート調査ではみられなかった。「出席」による評価を用いている授業があった。	授業の設計図であるシラバスに記載してある内容・方法が、授業者の意図と離れている場合がある。
改善の手立て	目標の4領域をバランスよく設定するために”仲間と協力して学習を進めることができる”などといった行動目標を設定する。	学修形態について、グループでの学習を行い、学生相互の関わり合いを保証して、授業に対する満足感と愛好的態度を育む。	「出席」による評価は学生の学修成果を真に評価できないという点から、不適切であり、これを改める。学修カードなど、思考の過程や学修の記録を視覚化する工夫をする。	授業中に配布する資料やWebなどにおいて、授業に関する情報を補完する。

(川戸・長谷川、2019、p.40より加筆修正して引用)

まえ、大学体育における柔道授業に関する研究の更なる進展が望まれるが、そのためにも、これまでの大学体育における柔道授業に関する研究成果や動向についての把握が必要であると考えられる。研究成果や研究動向を整理することは、研究上の蓄積や知見の有用性についても検討できる点で必要な作業であるといえるが、管見の限り、大学体育における柔道授業に関する研究成果や研究動向を整理した文献は確認できない。そこで、本研究では、大学体育における柔道授業に関する研究成果を整理し、その研究動向の把握を試みるとともに、今後の研究の方向性についても検討する。

II. 本研究の目的と方法

本研究は、大学体育における柔道授業に関する研究成果の整理を通じて研究動向を明らかにし、教育の質保証に向けた今後の研究の方向性について検討することを目的とする。

研究方法として、本研究では文献データベース Cinii Research を用いて研究対象となる文献を収集した。具体的な手順として、文献データベース Cinii Research における検索機能を用いて文献の収集を行った。検索に際して、検索語として「大学」「柔道」「体育」「授業」「実技」「実習」の6語をキーワードに検索した²。次に、抽出された文献のうち、重複して表示された同一文献や学会発表の抄録を除外した。そして、除外して残った文献の内容を確認し、大学生を研究対象としているが研究目的と大学体育における柔道授業との関連性が見られない文献や研究における分析対象者が明示されていない文献を除外し、残った文献を本研究の分析対象とした³。なお、川戸・長谷川(2019)の研究では大学校および高等専門学校における柔道授業については分析対象として含まれていない。そのため、本研究においても、大学校および専門学校(高等専門学校や柔道整復師を養成する専修学校など)における柔道授業について

は、分析の対象外とした。

以上の手順を経て分析対象となる文献を選定し、各研究内容のうち特に研究目的の部分に着目し、研究内容を整理することを通じて研究動向について考察する。また、今後の研究の方向性を検討するにあたっては、川戸・長谷川(2019)によって示された大学体育における柔道授業の授業設計に関する課題を参照し、教育の質保証という観点からこれまでの研究成果との関連性を考察して検討を行った。

III. 結果と考察

1. 分析対象として抽出された文献について

前述した方法によって文献を収集した結果、539件の文献が検索結果として確認された。このうち、学会抄録等を除外した後、記載内容を確認した結果、本研究の分析対象として36件の文献が抽出された。抽出された論文を発行年別に並べると、表2のように整理された。

2. 各研究内容の概要および研究目的に基づく分類

本研究の分析対象として抽出された36件の文献に記載された内容について、それぞれの研究目的に着目して確認したところ、各研究内容は以下のように整理された。

まず、学習者のもつ柔道ないし柔道授業に対するイメージを調査した研究である。こうした研究では、体育・スポーツに関する学問領域を専攻していない学生を対象とする、所謂一般体育の受講生を対象とした研究(桐生ほか, 2016; 石川ほか, 2011; 小俣ほか, 1991, 1993; 小宮ほか, 1990)が多くみられる。これらの研究は、「中学校・高等学校段階での柔道学習に対するイメージや態度評価は決して高いものとは言えず、大学一般体育実技導入に際して暗い影を投げかけている」(小宮ほか, 1990, p.127)という言葉に示されるよ

表2 本研究の分析対象となった文献の一覧

著者名(発行年)	文 献 タ イ ト ル
川戸湧也・長谷川悦示・木内敦詞・梶田和宏・熊田祥江・小崎亮輔・矢部哲也(2022)	ADDIEモデルに基づく大学柔道授業の外的妥当性検証と若手教員のFDへの示唆
岡崎祐史・大藤潤也(2022)	柔道授業におけるディフェンス畳を用いた初心者指導の有用性についての一考察
松村優輝・松下盛泰・渡辺輝也(2022)	ウィズコロナ時代の柔道の専門実技における学修成果の保障に向けた試み：パディシステムの導入を含む各種取り組みの成果と課題の検討
植田真帆(2022)	「体育実技(柔道)」授業実践の検討：グループ学習による対人的な技能習熟をめざした取組
林弘典・石川美久・生田秀和(2021b)	保健体育科教員を養成する大学の柔道授業に対する提案(1) 授業環境・状況、礼法、柔道衣、受け身、教員と学生に求められる能力
林弘典・石川美久・生田秀和(2021c)	保健体育科教員を養成する大学の柔道授業に対する提案(2) 組み方と立ち枝の乱取りの指導
林弘典・石川美久・生田秀和(2021d)	保健体育科教員を養成する大学の柔道授業に対する提案(3) 大外刈り・絞め技・関節技・試合の指導
林弘典・黒澤寛己・坂本道人・生田秀和・石川美久(2021f)	中学校・高校の保健体育科教員を養成する大学における柔道授業の在り方についての提言
田村昌大・松井高光・小林亮太(2021)	世界的流行性感染症拡大時における柔道実技授業の取り組みについて
牛山眞貴子・樗木武治(2021)	COVID-19防止対策を講じたスポーツ指導実習「柔道」の実践と課題
川戸湧也(2020)	柔道授業における授業外学修を促進するWebサイト活用の試み
川戸湧也・長谷川悦示・木内敦詞・梶田和宏・中川昭(2020)	大学体育のADDIEモデルに基づく柔道授業の有効性の検証。体育学研究, 65:775-792.
島孟留・田井健太郎・霜触智紀(2020)	体育実習が大学生の共感性並びに社会的スキルに及ぼす影響—柔道実習の効果に対する一考察—
稲川郁子・畑山元政・阿部恭子(2018)	柔道の「形」における具体的指導の重要性：大学生に対する「投の形」の授業実践から
丸山照晶・久保田浩史(2018)	柔道授業における「じゃんけん柔道」の開発
永木耕介(2018)	外国語による言語活動を導入したスポーツ演習科目の試み：大学における外国人留学生が日本語を介して学習する「柔道・JUDO」の授業計画案
林弘典(2017)	びわこ成蹊スポーツ大学における柔道の授業について
桐生習作・鍋山隆弘・山口香・福見友子(2016)	2学期制移行後の共通体育柔道における大学生の武道に対するイメージ
村元辰寛(2016)	体育を専門に学ぶ大学生の柔道観に関する研究
山崎元太・塚田真希・鈴木桂治・田中力・福見友子・射手矢岬(2016)	柔道授業における投げ技・固め技の危険場面の認識：男女大学生の比較
桐生習作・市村さやか・川戸湧也・武井嘉恵・松元剛・三木ひろみ(2015)	〈報告〉Tsukuba Summer Institute for Physical Education and Sport 2014における柔道実習報告
鯨根敏和・有山篤利・藤野貴之・中嶋啓之(2015)	発見型柔道授業プログラムを構成する新受身プログラムの有効性の検証
桐生習作・小林優希・中野勝司・藤田湧平・松元剛・三木ひろみ(2014)	〈報告〉Tsukuba Summer Institute for Physical Education and Sport 2013 柔道実習報告
桐生習作・小倉武蔵・村瀬陽介・武田丈太郎・松元剛・三木ひろみ(2013)	〈報告〉Tsukuba Summer Institute for Physical Education and Sport 2012 柔道実習報告
石川美久・遠藤知里・小田梓・坂本道人・鍋山隆弘・小俣幸嗣(2011)	共通体育柔道における大学生の武道に対するイメージ変化
亀丸政弘(2011)	柔道と護身術を融合した体育実習の心理社会的効果の検討：鹿児島国際大学の事例
檜崎教子(2011)	保健体育・スポーツ科学専攻学生に対する柔道の教育実践と授業づくり
中西英敏・佐藤宣踐・橋本敏明・白瀬英春・山下泰裕・宮崎誠司・上水研一朗(2008)	海外柔道実習における異文化理解教育について
高橋進・武内政幸・矢野勝・三宅仁・若山英央(2008)	柔道授業に構成的グループエンカウンターを導入した場合の効果について(第2報)：授業評価観点と態度との関係
加藤孝幸・齋藤孝滋(2007)	<授業報告>「日本事情」としての柔道実技体験学習と教育的効果
中西英敏・佐藤宣踐・橋本敏明(2007)	海外柔道実習における異文化理解教育について
小俣幸嗣・中村良三・藤堂良明・佐藤伸一郎・高橋幸治・青柳領(1993)	正課体育柔道受講生の柔道に対するイメージの研究
小俣幸嗣・中村良三・藤堂良明・佐藤伸一郎・高橋幸治・青柳領(1991)	正課体育柔道受講生の意識に関する研究
小宮徳健・貝瀬輝夫・森藤才・若林眞・高橋進(1990)	柔道に対する学習者の原因帰属様式について(その3)—大学一般体育柔道履修者について—
佐々木武人(1983)	柔道授業における学習者の技能認識と問題点について
柳沢久・川村禎三・竹内善徳(1977)	柔道授業中の心拍数変動

うに、柔道授業に対する受講生のネガティブなイメージを問題視しており、大学体育における柔道授業を実践する上での課題を受講者側の立場から明らかにしていくことが目指されている。こうした受講者の立場に着目した研究はほかにも見られ、体育・スポーツに関する学問を専攻する学生の柔道観を対象とした村元（2016）や、受講者の柔道授業場面における危険認識や柔道の技能認識、授業中における心拍数の変動といったように、より具体的に受講者の特徴や属性の把握に努めようとする研究が確認できる（山崎ほか、2016；佐々木、1983；柳沢ほか、1977）。その他、受講者がこれまでに中学校・高等学校段階までの柔道授業を通じて獲得した柔道に関する知識の獲得状況を調査した林ら（2021f）の研究もあり、柔道授業の受講者の実態把握に関しては様々な観点からの研究の蓄積が確認できる。

次に、柔道授業における教授内容や方法と関連する研究が確認できる。例えば、2020年以降の新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、身体接触を伴う柔道授業の具体的実施方法を検討した研究（松村ほか、2021）や実践報告（田村ほか、2021；牛山ほか、2021）のように特異的な状況に対応することを主たる目的とする研究がいくつか確認できる。こういった特定の時代状況を前提とした研究だけではなく、柔道授業においてグループ学習の適用を試みた植田（2022）のように学習形態に着目した研究や、心理学者・國分康孝によって紹介された「構成的グループエンカウンター」という概念を受講者が二人一組で学習する際の方法として導入し、その学修成果を検証した高橋ら（2008）のように、一斉指導以外の指導方法を模索した研究も確認できる。また、受講者が「間合い」や「理合い」といった武道における専門用語の示す具体的な身体動作を獲得できるように「投の形」を学習内容の中心として設定した稲川ら（2018）や柔道経験のない学習者の技能習熟を目的とした教材・教具開発を試みた研究（岡

崎・大藤、2022；丸山・久保田、2018；藪根ほか、2015）、授業時間外における学修を促進するためのツールとして当該授業専用のWebサイトの作成と活用を試みた研究（川戸、2020）もみられ、柔道授業における教授内容・方法の具体的な検討がなされている。この他にも、授業の実践報告についても多数確認できる（永木、2018；林、2017；桐生ほか、2013、2014、2015；檜崎、2011；中西ほか、2007、2008；加藤・斎藤、2007）。これらの実践報告の多くは、短期間の集中授業として実施された内容の報告や著者自身の所属する大学における柔道授業の取組に関する紹介に留まるものではあるが、永木（2018）や加藤・斎藤（2007）の実践報告のように、国際理解という視点から柔道の教材的価値を再検討した実践事例も含まれている。この点から、実践報告の中には単なる運動技能の学習に留まらない柔道授業の在り方について示唆を与える内容も含まれていることが確認できる。このように、柔道授業における教授内容や方法に関連する研究成果については、これまでに数多くの知見が示されてきたといえる。

この他にも、川戸・長谷川（2020）、川戸ほか（2022）のような授業設計における具体的な理論モデルを援用して実施された柔道授業の成果検証や、島ら（2020）、亀丸（2011）のように柔道授業を通じた学修成果を受講者の社会的スキルや心理的变化の観点から検証した研究もみられる。これらの研究は、大学体育における柔道授業の具体的な実施モデルや柔道授業によって獲得することが期待される学修成果を実証的に示した研究成果といえよう。

本研究の分析対象とした研究内容について以上のように整理された。この結果を踏まえて、これまでの大学体育における柔道授業の研究動向をみると、主な方向性としては学習者の実態把握に関する研究と教授内容や方法に関する研究の2点に大別されるといえよう。

後者については、大学体育における授業研究にお

いては教材開発や授業案の提案が多いという指摘(川戸ほか, 2020)に鑑みると、大学体育における柔道授業特有の研究動向というよりも、大学体育における授業研究全般に関わる傾向が反映されたものであるといえる。この点を踏まえると、前者の学習者の実態把握について研究の蓄積が重ねられてきたことは、大学体育における柔道授業の研究動向に関する特徴のひとつとして捉えられよう。

3. 授業設計の3要素との関連性に基づく、今後の研究の方向性について

大学体育における柔道授業に関する研究内容および研究動向が上記のように整理されたとき、川戸・長谷川(2019)が示した授業設計の3要素に基づく課題に対して、各研究内容はどのような示唆を与えるものといえるか。以下、授業設計の3つの要素である目標、内容・方法、評価方法の3点と各研究内容で示された成果と課題との関連性を考察し、今後の研究の方向性について検討する。

まず、目標に関して、川戸・長谷川(2019)の調査では「社会的行動領域」と「情意領域」の2つの領域に関する目標設定が確認できないことを大学体育における柔道授業の課題のひとつとして指摘し、改善策として「“仲間と協力して学習を進めることができる”という行動目標を設定する」(川戸・長谷川, 2019, p.40)ことを示している⁴。この点を踏まえると、島ら(2020)による柔道授業を通じた心理的変化や社会的スキルに関する研究成果は、行動目標をより具体的に設定するうえで示唆的である。島ら(2020)の研究結果では、柔道授業を通じての受講者の社会的スキルに関する有意な変化が確認できず、この点について実技練習に際して受講者同士の組み合わせを固定化させたことが影響した可能性を示唆している。島ら(2020)の研究についてはサンプル数の増大や毎回の授業後の調査による形成的授業評価によって分析する必要性など課題が残されている

ものの、受講者同士が複数人で協力して学習を進めることが大学体育における柔道授業の行動目標の具体的な条件である可能性を示唆しているといえる。後述するグループ学習の観点との兼ね合いからも、受講者同士が実技練習をする際の組み合わせの流動性が社会的スキルにどのような影響を与えるのかについては、今後明らかにする必要があるといえよう。

次に、内容・方法に関して、川戸・長谷川(2019)は学習形態としてグループ学習を導入することを授業の質保証という観点に基づく改善策として指摘している。この点について、植田(2022)はグループ学習を導入した柔道授業において、投げ技や抑え技の原理的な理解や攻防場面において創意工夫が受講者の間で進められたことを、受講者の記述したリアクションペーパーから推察しており、技能習熟におけるグループ学習の有用性を明らかにしている。ただし、植田(2022)は、リアクションペーパーの記述内容から、受講者同士のどのような関わり合いが技能習熟へと結びついたか十分に読み取ることができなかったことを課題としてあげている。この点に鑑みたとき、グループ学習における受講者同士の関わり合いの類型化など、受講者の関わり合いについての実態把握が今後必要であるといえよう。

評価方法に関しては、川戸・長谷川(2019)は、実技テスト以外にも出席状況による評価がなされている点を学修成果の評価方法としての妥当性の観点から問題視し、受講者に文章を記述させるなどの学修記録を視覚的に把握する評価方法を用いる必要性を指摘している。本研究で分析対象とした文献では、評価方法を直接の研究対象とした研究は確認されなかった。ただし、川戸・長谷川(2020)では授業設計の理論モデルのひとつであるADDIEモデルに基づいて考案された柔道授業が実践されており、その中で評価方法に関してもいくつかの知見が得られたことが示されている。川戸・長谷川(2020)は受講者の学修成果を評価

するにあたり、毎回の授業前後に記入する「学習ノート」と、講義を中心とする授業回に実施した「レポート課題」と実技テストの3つを採用している。「学習ノート」と「レポート課題」の採点基準については、事前に設定したキーワードが文章中に使用されているかなどルーブリック評価に基づいており、採点結果と最終的な成績評価判定との関連性についても統計処理に基づいて検討した結果、両者に正の相関関係が見られたことを明らかにしている。このように、実技テスト以外にも学修成果を評価する方法の具体的な条件について示唆を与える知見が確認できる一方で、川戸・長谷川（2020）の研究では、学習ノートのルーブリックとして授業中の安全への配慮に関する内容を設定できなかった点を課題としてあげている。この安全への配慮に関する内容は、「社会的行動領域」や「情意領域」との関連すると考えられることから、安全への配慮に関する内容を受講者の記述内容からどのように評価するかについては、今後の評価方法に関する研究を進めていくうえでの具体的な課題のひとつであるといえよう。

IV. 本研究のまとめ

本研究では、これまでの大学体育における柔道授業の研究動向について明らかにすることを試みた。また、研究動向の把握を通じて、先行研究において示されていた課題に対して従来の研究成果が示唆する内容を考察し、大学体育における柔道授業に関する研究の今後の方向性について検討した。

分析対象となった文献は36件となった。文献の種別をみると、紀要論文の数の割合が多い結果ではあったが、『体育学研究』『武道学研究』『大学体育スポーツ学研究』などの学会誌等に掲載された論文もいくつか見られた。研究成果を共有するという観点からも、学会誌等への投稿は今後も積極的に行われていくことが求められる。

研究動向としては、授業における教授内容や方法に関する研究のほか、受講生の実態に関する研究が継続的に行われていることが確認された。近年の大学教育では、学習者の立場から内容を捉える考え方が主流であることを踏まえると、受講生の実態に関するこれまでの知見は、教育の質保証に向けて柔道授業が担うことのできる内容を改めて検討する際の視座のひとつとしても活用できるであろう。

このような研究動向の把握のもとに、今後の研究の方向性について、教育の質保証という観点から考察を行った。その結果、目標、内容・方法、評価方法のそれぞれ観点で示された課題と従来の知見の関連性が整理され、各観点で示された課題の具体的な内容への示唆が読み取れた。教育の質保証に向けた大学教育改革は今後益々進められていくことに鑑みても、本研究において確認された課題に基づく研究の進展が求められるといえよう。

【注】

- 1 川戸・長谷川（2019）は対象種目として柔道に着目した理由として、柔道は創始者・嘉納治五郎によって当初から身体活動を通じて技能や情意を一体的に育むことが明示的に志向されてきたことから、「大学体育の教育目的に非常に近い目的と価値観を持っている」（川戸・長谷川，2019，p.29）ことを種目選定の理由の一つとして述べている。
- 2 検索に際して、フリーワード検索欄に「(大学 OR 柔道) (授業 OR 体育 OR 実技 OR 実習)」と入力し、次いでタイトル検索欄に「(柔道) (授業 OR 体育 OR 実技 OR 実習)」と入力して検索を行った。
- 3 内容を確認し、本研究の分析対象として除外した文献は以下の通りである。

吉田勲生・本城久司・沖和久・神内伸晃・小川豊清・岡田成賛（2022）柔道実技における技術指導について―背負投に対する受け身の方法についての考察―。明治国際医療大学誌, 23(24)：48.
林弘典・石川美久・生田秀和（2021a）今後の中学生・高校生における柔道授業の検討：中学校・高校の柔道授業を経験した大学生における男女

- 別の比較. 研究紀要, 19: 9-17.
- 林弘典・石川美久・生田秀和 (2021e) 今後の中学校・高校における柔道授業の検討: 柔道授業の経験の有無による比較. 研究紀要, 19: 99-106.
- 光岡かおり・杉山三郎 (2014) スポーツ系学科における柔道の部活動と授業での事故防止に関する検討. 日本柔道整復接骨医学会誌, 22(3): 79-88.
- 濱田初幸 (2014) 国立体育大学 (国際交流協定締結校・台湾) における柔道指導. 学術研究紀要, 49: 21-24.
- 小山泰文・森脇保彦・斉藤仁 (2010) 本学 [国士舘大学] 体育学部武道学科柔道専攻学生の形態及び体力の縦断変化. 国士舘大学体育研究所報, 29: 123-126.
- 南谷直利・山崎正枝・蒲真理子・川端健司・山本博男 (2009) 大学生を対象とした柔道場エアロビクス授業の事例研究. 北陸大学紀要, 33: 83-99.
- 吉田ほか (2022) では分析対象者が大学生であったかが確認できなかった。林ほか (2021a, 2021e) は研究の主要な関心が中学校・高等学校における柔道授業の改善に焦点が当てられていた。光岡・杉山 (2014) は柔道部に所属する学生の傷害調査が研究内容の中心であった。濱田 (2014)、小山ほか (2010)、南谷ほか (2009) では柔道授業との関連性は見られなかった。
- 4 高橋 (1989) によれば、体育の教科内容は「情意 (affective) 領域」「運動技能 (psychomotor) 領域」「認識 (cognitive) 領域」「社会的行動 (socio-behavioral) 領域」の4つに分類される。また、友添 (2010) によれば、「社会的行動領域」は「マナーやエチケットといった社会的スキルや人間関係スキルのこと」を指し、「情意領域」は「スポーツに対する興味、関心、意欲、愛好的態度育成に関すること」を指すものであるとされ、体育で保障すべき学力の定着や教科構造の鮮明化という観点からも、各領域に応じて設定された目標と教科内容の一貫性が重要であると述べている。
- 【引用・参考文献一覧】**
- 中央教育審議会 (2018) 2040年に向けた高等教育のグランドデザイン (答申). 文部科学省, https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt_koutou01-100006282_1.pdf, (参照日 2022年9月30日).
- 濱田初幸 (2014) 国立体育大学 (国際交流協定締結校・台湾) における柔道指導. 学術研究紀要, 49: 21-24.
- 林弘典 (2017) びわこ成蹊スポーツ大学における柔道の授業について. 研究紀要, 14: 205-208.
- 林弘典・石川美久・生田秀和 (2021a) 今後の中学生・高校生における柔道授業の検討: 中学校・高校の柔道授業を経験した大学生における男女別の比較. 研究紀要, 19: 9-17.
- 林弘典・石川美久・生田秀和 (2021b) 保健体育科教員を養成する大学の柔道授業に対する提案 (1) 授業環境・状況, 礼法, 柔道衣, 受け身, 教員と学生に求められる能力. 研究紀要, 19: 53-66.
- 林弘典・石川美久・生田秀和 (2021c) 保健体育科教員を養成する大学の柔道授業に対する提案 (2) 組み方と立ち技の乱取りの指導. 研究紀要, 19: 67-76.
- 林弘典・石川美久・生田秀和 (2021d) 保健体育科教員を養成する大学の柔道授業に対する提案 (3) 大外刈り・絞め技・関節技・試合の指導. 研究紀要, 19: 77-86.
- 林弘典・石川美久・生田秀和 (2021e) 今後の中学校・高校における柔道授業の検討: 柔道授業の経験の有無による比較. 研究紀要, 19: 99-106.
- 林弘典・黒澤寛己・坂本道人・生田秀和・石川美久 (2021f) 中学校・高校の保健体育科教員を養成する大学における柔道授業の在り方についての提言. 研究紀要, 18: 25-35.
- 稲川郁子・畑山元政・阿部恭子 (2018) 柔道の「形」における具体的指導の重要性: 大学生に対する「投の形」の授業実践から. 常葉大学健康プロデュース学部雑誌, 12(1): 137-143.
- 石川美久・遠藤知里・小田梓・坂本道人・鍋山隆弘・小俣幸嗣 (2011) 共通体育柔道における大学生の武道に対するイメージ変化. 大学体育研究 33: 11-20.
- 亀丸政弘 (2011) 柔道と護身術を融合した体育実習の心理社会的効果の検討: 鹿児島国際大学の事例. 国際文化学部論集, 12(1): 31-47.
- 加藤孝幸・齋藤孝滋 (2007) 〈授業報告〉「日本事情」としての柔道実技体験学習と教育的効果. フェリス女学院大学文学部紀要, 42: 91-102.
- 川戸湧也 (2020) 柔道授業における授業外学修を促進する Web サイト活用の試み. 仙台大学紀要, 51(2): 33-41.
- 川戸湧也・長谷川悦示 (2019) 大学体育における柔道授業の授業設計の実態. 大学体育スポーツ学研究, 16: 27-42.
- 川戸湧也・長谷川悦示・木内敦詞・梶田和宏・熊田祥

- 江・小崎亮輔・矢部哲也 (2022) ADDIE モデルに基づく大学柔道授業の外的妥当性検証と若手教員のFDへの示唆. 大学体育スポーツ学研究, 19: 115-126.
- 川戸湧也・長谷川悦示・木内敦詞・梶田和宏・中川昭 (2020) 大学体育のADDIEモデルに基づく柔道授業の有効性の検証. 体育学研究, 65: 775-792.
- 桐生習作・市村さやか・川戸湧也・武井嘉恵・松元剛・三木ひろみ (2015) 〈報告〉Tsukuba Summer Institute for Physical Education and Sport 2014における柔道実習報告. 大学体育研究, 37: 19-25.
- 桐生習作・小林優希・中野勝司・藤田湧平・松元剛・三木ひろみ (2014) 〈報告〉Tsukuba Summer Institute for Physical Education and Sport 2013 柔道実習報告. 大学体育研究, 36: 63-71.
- 桐生習作・鍋山隆弘・山口香・福見友子 (2016) 2学期制移行後の共通体育柔道における大学生の武道に対するイメージ. 筑波大学体育系紀要, 39: 89-92.
- 桐生習作・小倉武蔵・村瀬陽介・武田丈太郎・松元剛・三木ひろみ (2013) 〈報告〉Tsukuba Summer Institute for Physical Education and Sport 2012 柔道実習報告. 大学体育研究, 35: 75-85.
- 小侯幸嗣・中村良三・藤堂良明・佐藤伸一郎・高橋幸治・青柳領 (1991) 正課体育柔道受講生の意識に関する研究. 武道学研究, 24(2): 115-116.
- 小侯幸嗣・中村良三・藤堂良明・佐藤伸一郎・高橋幸治・青柳領 (1993) 正課体育柔道受講生の柔道に対するイメージの研究. 大学体育研究, 15: 11-22.
- 小宮徳健・貝瀬輝夫・森藤才・若林眞・高橋進 (1990) 柔道に対する学習者の原因帰属様式について (その3)―大学一般体育柔道履修者について―. 武道学研究, 23(2): 127-128.
- 小山泰文・森脇保彦・齊藤仁 (2010) 本学 [国土館大学] 体育学部武道学科柔道専攻学生の形態及び体力の縦断変化. 国土館大学体育研究所報, 29: 123-126.
- 松村優輝・松下盛泰・渡辺輝也 (2022) ウィズコロナ時代の柔道の専門実技における学修成果の保障に向けた試み: パディシステムの導入を含む各種取り組みの成果と課題の検討. スポーツパフォーマンス研究, 14: 68-81.
- 丸山照晶・久保田浩史 (2018) 柔道授業における「じゃんけん柔道」の開発. 武道学研究, 51(2): 125-134.
- 南谷直利・山崎正枝・蒲真理子・川端健司・山本博男 (2009) 大学生を対象とした柔道場エアロビクス授業の事例研究. 北陸大学紀要, 33: 83-99.
- 光岡かおり・杉山三郎 (2014) スポーツ系学科における柔道の部活動と授業での事故防止に関する検討. 日本柔道整復接骨医学会誌, 22(3): 79-88.
- 村元辰寛 (2016) 体育を専門に学ぶ大学生の柔道観に関する研究. スポーツサイエンス, 10(1): 35-47.
- 永木耕介 (2018) 外国語による言語活動を導入したスポーツ演習科目の試み: 大学における外国人留学生が日本語を介して学習する「柔道・JUDO」の授業計画案. 法政大学スポーツ健康学研究, 9: 41-48.
- 中西英敏・佐藤宣践・橋本敏明 (2007) 海外柔道実習における異文化理解教育について. 東海大学紀要 体育学部, 37: 101-105.
- 中西英敏・佐藤宣践・橋本敏明・白瀬英春・山下泰裕・宮崎誠司・上水研一郎 (2008) 海外柔道実習における異文化理解教育について. 東海大学紀要 体育学部, 37: 101-105.
- 橋崎教子 (2011) 保健体育・スポーツ科学専攻学生に対する柔道の教育実践と授業づくり. 教育実践研究, 19: 135-138.
- 岡崎祐史・大藤潤也 (2022) 柔道授業におけるディフェンス量を用いた初心者指導の有用性についての一考察. 武庫川女子大学紀要, 69: 29-36.
- 佐々木武人 (1983) 柔道授業における学習者の技能認識と問題点について. 福島大学教育実践研究紀要, 3: 93-102.
- 島孟留・田井健太郎・霜触智紀 (2020) 体育実習が大学生の共感性並びに社会的スキルに及ぼす影響―柔道実習の効果に対する一考察―. 群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編, 55: 61-67.
- 高橋進・武内政幸・矢野勝・三宅仁・若山英央 (2008) 柔道授業に構成的グループエンカウンターを導入した場合の効果について (第2報): 授業評価観点と態度との関係. 大東文化大学紀要 社会科学, 46: A169-A185.
- 高橋健夫 (1989) 新しい体育の授業研究. 大修館書店, pp.11-14.
- 田村昌大・松井高光・小林亮太 (2021) 世界的流行性感染症拡大時における柔道実技授業の取り組みについて. 帝京科学大学教育・教職研究, 6(2): 97-100.
- 友添秀則 (2010) 体育の目標と内容. 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編著, 新版体育科教育学入門. 大修館書店, pp.30-37.
- 植田真帆 (2022) 「体育実技 (柔道)」授業実践の検討: グループ学習による対人的な技能習熟をめざした取組. 東海学園大学教育研究紀要: スポーツ健康科学部, 7: 4-10.

牛山真貴子・樗木武治（2021）COVID-19 防止対策を講じたスポーツ指導実習「柔道」の実践と課題. 愛媛大学社会共創学部紀要, 5(1) : 75-80.

藪根敏和・有山篤利・藤野貴之・中嶋啓之（2015）発見型柔道授業プログラムを構成する新受身プログラムの有効性の検証. 京都教育大学紀要, 126 : 25-36.

山崎元太・塚田真希・鈴木桂治・田中力・福見友子・射手矢岬（2016）柔道授業における投げ技・固め技の危険場面の認識：男女大学生の比較. 東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系, 68 : 199-204.

柳沢久・川村禎三・竹内善徳（1977）柔道授業中の心拍数変動. 武道学研究, 10 (2) : 106-108.

吉田勲生・本城久司・沖和久・神内伸晃・小川豊清・岡田成賛（2022）柔道実技における技術指導について―一背負投に対する受け身の方法についての考察―.

明治国際医療大学誌, 23(24) : 48.

全国大学体育連合・日本体育学会・日本女子体育連盟・日本体力医学会・全国体育系大学学長・学部長会・日本教育大学協会（2009）学士課程教育に関する共同声明. <http://daitairen.or.jp/2013/wp-content/uploads/2014/08/7469eb961a8c88f812b-b9a473abab12d.pdf>, (参照日 2022年9月30日).

全国体育系大学学長・学部長会教育の質保証委員会編（2011）体育・スポーツ学分野における教育の質保証：参照基準と教育関連調査結果. 全国体育系大学学長・学部長会事務局.

(2022年12月28日受理)